

Q: 仏道における運命と宿命っていう考え方と、因果応報とか因縁っていう考え方について、小池さんの解釈みたいなのを知りたいのですが、運命っていうと決まっているもので、無我っていう観点から見ると自分というものはないので、運命によって全てが作られているっていうふうにも解釈できそうなんですけど、一方では因果応報とか因縁っていうのは自分には意思があると思っていて、この瞬間に自分は何を選択するかとか善き行いをするとかっていう積み重ねが因縁や因果応報を作っていて、今世か来世かでそれが返ってきている。この二つの考え方っていうのは私は、なんかあんまり…。

A: なじまないような気がする？

Q: はい、なじまないような気が。

A: ほんとう？同じことではないですか？

Q: うーん、私の解釈では、運命はコントロールができない、そんなふうにつまみついていて、で、後者は自分の意思でやっているような気がして、良くも悪くも。ただ、今学習している、無我っていう観点で言うと、その意思はないっていうことになるので、そこがなんか究極、じゃ何なんだろうなっていう、よく分からないなっていうふうになっています。

A: なるほど。

前のことが原因となって次のことが起きるんですよ。これを因果関係と言いますね。原因があって、原因それは自然界でも因果関係に基づいて物事が起きていますし、あるいは、生命体に関して言えば、過去に何か思ったことがあって、それが記憶として残っていて、それが原因としてあって、接触した情報が条件として働いて、でも過去からの因縁がある以上、そのように接触した情報に対して何を思うかとか、どういう気分になるかとか、どんな感情が湧いてくるかということとは誰にも選ぶことはできません。勝手に湧いてくるからです。それを因・縁と言います。つまり、そこに意思があるというふうにおっしゃいましたが、そこに意思はありません。接触した情報に対して、勝手に思うだけだからです。それは例えば、今日二

時の時計の鐘が鳴ったのが聞こえて、坐禅が終る時間だ、と分かる時、「私に分かる」などと誰もしていないようなものです。鐘の音がボーン、ボーンと鳴ったら電光石火で、勝手に分かっているでしょう？二時の鐘が鳴ったからこれから私はこのような気分になることにしましょう、と決められる人はこの宇宙に誰もいません。私は意志が固いからそういうことができます、と言ってる人がいたら、嘘をついています、それは。情報が接触したら勝手に思いが出てくるからです。で、重要なのは、その思いが出てきたときにそれに執着するか執着しないかということです。執着したら、それが次の因縁に、それがまた心に強く染みついて、次の原因を用意して、その原因に基づいて次の感覚が接触して、そしてまた機械的に前のものが反復して生じたものにまた執着したならより強くなってより条件づけられた形でそこの方向に働いて、それがまた生じるという結果を生じます。で、その結果に執着したらまたそれが次の原因になって、それを反復するような出来事と呼び寄せて、そしてその感情を反復して、でまたそれに執着したらまたそれ、という繰り返し。それを因果応報とか因縁と言うんです。そのように因果応報として物事が自動生起する以上は、自我というのはもともとありませんし、私というのは見出されません。ただし、意思というのは相対的に見出されます。というのは、例えば、「仕事がうまくいかない」という条件を入力されると、「いや、別にいいじゃないの」という出力をする人と、あるいは「やる気を失う」という出力の仕方をする人がいます。「やる気を失うことにしましょう」と思ってわざわざやる気を失う人なんか誰もいません。やる気を失ったって何も得はないのに。勝手にやる気を失うだけです。あるいは、「やる気を失わないように選択したからした」という人はいなくて、ただやる気を失わないだけです。そういう過去からの条件が備わっているのである。原因が備わっているのだから、その過去の原因に基づいてそういう結果が生じているだけなんです。なので、そこに私の意思というのは見出されません。が、意思というのは見出されます。私ではない、ただの意思は見出され

ます。「やる気を失う」という意思是勝手に生じます。意思として生じます。あるいは「やる気を失わない」というのも何の選択もしてないように見えますが、一応心の選択として、「困難が生じるけど別にめげないぞ」「気にしないぞ」というのがパッと生じるとき、それは因縁に基づいて、そういう意思をやり通すという、一つの意味決定が心の中に生じています。決定している「私」というのはいないということです。

重要なのは、ほとんどの人が、私が決定していると思込んでいる。から、その無知に基づいて執着してしまうということです。「私がやり通した」って思いこんじゃう。私がやり通したわけじゃないのに。あるいは「私がやる気をなくした」と思いこんじゃう。から、自己批判したりします。「やる気をなくした私がいけない」とか自我を見出して、自分を非難したり、「自分がやり通したぞ」「自分が坐禅をうまくいったぞ」とか、自分の意思だと思込込んで、自分という幻を褒めたりけなしたりします。という執着をします。褒めるという執着をします。けなすという執着をします。執着をするとその回路が太くなります。太くなるとより強固な原因になって反復します。というようなことが起きているだけで、そこに人とか人格とか私というのは見出されません。

こうやって執着を繰り返すことを前提に運命というのは非常に強固に組み立てられています。過去からの因縁で、原因と条件がものすごくたくさん絡み合っ、逐一それらが生じる都度に「私がそうした」「私が失敗した」「私が成功した」って思って執着してしがみついてへばりつくでしょう。なので、そのへばりついて「私が」っていう、いないのに、でも「いる」って思い込むせいでそれが強く染みつくんです。それらが染みつくことを前提に運命が組み立てられています。

ですから、誰も染みついてそれに執着して、みんながそうやって生きています。から運命どおりです。執着している通りに、生まれたときからの運命通りに、執着していること込みで運命が組み立てられているので、みんな「私」と思って執着している以上、1ミリたりとも運命からずれずに、そのままそのまま、たまたまいい運命を持つてる

人は、執着してても過去の業が良かったおかげでその業の力が残存しているので、その良い業の運命が続いている間はたまたまいい人生を歩みます。が、その執着のせいで、そのパワーが尽きたらやがて悪くなります。ましてや、もともと悪い人は最悪です。でもそれを「私だ」とか「私がダメだ」「また私はうまく行かない」「また私はなんとかかんとかだ」と執着するパワーもうまく利用して、とにかく運命はその方向に回るようにできているところに、「私じゃないんだ」「私はいないんだ」って分かってしまうとどうなりますか？その運命をその通りに逐一動かすための歯車だったら、執着のパワーが取れてしまったら、そこに「私」って見出さなくなったら、そのパターンを反復できなくなるでしょう。記憶からそれが抜け落ちていくから。抜け落ちていってしまったら、つまり、悪い業をいっぱい積んでいる人っていうのは、嫌なおばさんばかりが頭の中で喋るクセがついているってということなんです。(編集注：「おばさん」とは、頭の中で生じる様々な思考のことを、多人数のおばさんが頭の中に住んでいて、井戸端会議をしているというイメージに託したものです。)でも、「そのおばさん私じゃないし関係ない」って思い始めると、そういうおばさんのクセが抜けていって、抜けていけばどうなりますか？嫌なおばさんの数が減れば、当然相対的に好ましいおばさんが増えざるを得ません。嫌な目的のために使われていた神経細胞が、良い目的のために使う以外、とにかく使わざるを得ないんですから、嫌な目的に使えなくなったら良い目的にしか使えなくなりますね。ないしニュートラルな目的か良い目的にしか使えないおばさんになっていきます。それはつまり必然的に良いおばさんを用いた運命に書き換わっていくということです。

執着していれば執着をうまく使った、今までと1ミリも変わらない、運命通りのもともと組み立てられていた業がとにかく発露して、それがまた次の業を生んでっていうのを繰り返します。で、それに執着しないという唯一の細い道を見つかることができれば、執着しないので過去の業の種は尽きていって、尽きていけばそのために使われて

いたおばさんが違う目的のために使われるので、それにおいて進む方向性が変わってくる。おばさんの喋り方が変わってくる。それに応じて、接触する出来事も変わってくる。原因が変われば、条件も変わってくる。原因も条件も違えば、出力は当然変わってくる。なので幸福になる、ということです。そのことにおいて因縁は変わります。運命も変わります。ですから、運命と因縁、同じことです。そういう観点からすると。

執着していれば、1ミリも変わりません。執着を離れば、変えるのではなくて、変容していきます。変えなくても、「あ、変わっていくんだ」という感じです。

別の生徒さんが手を挙げて質問（以下、Q2）：そこでちょっと疑問というか、あるんですけど。

A：いや、ほんとは疑問はないんですよ。つまり、そういう因縁で、疑問が勝手に生じたでしょう？あなたが疑問を抱いたか。いや、違いますよ。ねえ、そうでしょう。

Q2：そこで気づくか気づかないかっていうのも運命とか。そうすると、自分の頑張りどころはどこなのでしょう？例えば、気づけないけど、坐ったからといって気づけるってもんじゃないと思うんですけど、そこで坐って努力するのもしないのも運命とか、そのとき坐るか坐らないかっていうのは自分じゃないとも言えるんですけど…。

A：そうそう、惜しい。相当惜しいところで、微妙な疑問に惑わされて、何か分かりかけているところで分かりたくないような感じの、微妙なところで今うろろうされています。「気づいているのは誰なんだ」「気づいているのは私なんじゃないだろうか」という微妙な疑問とか、もしくは「じゃあ努力はどうなるんだ」という気持ちとか。で、その努力っていうのが、何か起きないことを起きさせようとするものだという理解がどこかに、今紛れ込んでしまっているんですよ。でも、努力というのは必要です。が、どのように努力をする必要があるのかというと、何も気負わないし、何も張り切らないし、やる気も失わないし、ただ継続的に何が起きてるかを気づき続けることです。で、

それをするための最良の道というのは、やがて分かってくれば、なーんにも力まないで、ただ心をニュートラルにしておく、ただそれだけです。ただ心をオープンにしておいて、何かに執着しない、この気持ちとかこの感情とかあの音とかあの匂いとかに執着しなければ、どれも見えてきます。全てものが見えてきます。そのために…

Q2：気づく…

A：そうです。勝手に気づいています。

Q2：それも運命というか…決まっている。自分じゃない。

A：そうです、そうです。そういうことです。ただ、運命とか決まっているという表現をそれにあてはめてしまうと、こんがらがるといふかやる気を失う方に働いてしまうので、「自分じゃない」という言い方、を今された、そっちの方がいいと思いますよ。つまり、そこに自分を見出したり、自我を見出したりしてる以上、「私がかんばる」という気持ちがどこかに残存して、すると「私がかうまくいった」「私がかうまくいかなかった」という思いを常にこびりつかせながら、「私がかうまくいったから喜ばしい」とか「私がか坐禅を失敗したから今日は好ましくない」とか、そういうのを常にまとわりつかせます。

ところが、だんだんだんだん、今申したような心のオープンさが分かってくれば、あるときはオープンになり、あるときは何かに囚われて、執着して気づかない感じになっていたり、あるときは気づいていたり、あるときは気づかなかったり、その差はなんだろうって分析してみると、単に執着してるか執着してないか、ということだけだと分かってきます。執着していると、「そこに私がかいる」という感覚を見出している。執着してないというのは、「私がかいない」というのを分かっている。分かってまではいなくても、なんとなく手放している。少なくとも、「その中に私はいないな」という感じを分かって感情を見ていたり、感覚を見ていたりしている。あるいは気づいていようと気づいていまいと、「あー、これは勝手に起きてることだから私じゃないな」という感じで、そのことを捉えていられる。というときに、

心は大変楽でクリアーに澄んでいます。で、それが本当に気づいているということです。

で、それをさせているかいないかの唯一の決め手は、最終的に煮詰めていくと、そこに我を見出しているか見出していないか、執着しているか執着していないかということに尽きてきます。その場合に、「それだと努力のしどころはどこなんだろう」って思ってる時、「努力のしどころはどこなんだろう」って思いに執着して、「そう思ってる私がいる」という気分を埋めるんですよ。それも、そういう気分が勝手に湧いてきただけで、つまりその気分に関わってる時、「気づきが大切だ」とか「気づきへの努力が失われたらどうしよう」って感じてる割には、そう感じてることに気づいてないんですよ、そのとき。

気づくってというのは、その「努力が大切だ」とか思うことも「勝手に湧いてきてるだけで私じゃない」と気づいておく。それに執着しないってということとセットなんですね。で、そのようなことが分かってくると、そういう分かりかけてるところで再び分かったような分からなさの中にはまり込ませることに気づいておいて、ただ「それも勝手に起きてるだけだからまあいいや」と手放しておくフラットさ、が回復するようにいつも取り組んでいること。どんどん分かってくるに従って、それが本当に分かってくると、取り組んでいるときと取り組んでないときの差ってのはなくなってきました。常時取り組んでるからです。いつだって執着しているか執着していないか、それだけです。「あ、執着してた。私を見出してた」って思ったら、手放したら気づきが回復する。手放したら気づいています。必ず気づいています。執着で曇らされてさえいなければ、実は心の本質はいつだって常に気づいてるからです。ですから、因縁として気づいているときと気づいていないときがありますが、気づいていないときは、「執着しているんだ」ということに気づいて手放せば、気づきは必ず勝手にそこに絶対にやってきます。100%です。ってというのは、執着をしてない状態の心に戻してやれば、その心の本質は絶対に気づいているからです。「は!？」って思うかもしれませんが、本当にそうです。それが分かって

きたら、要は、仕事をしてようと料理をしてようと、人と話していようと質問に答えていようと、あるいは質問をしていようと、疑問や質問が心の中に湧き上がってこようと、あるいは歩いていようと、電車の中だろうと、常時、執着しているか執着していないかっていうだけで、ああ、それがコンスタントにフラットにニュートラルに気負わずに、ずーっと続いている。それが正精進。正しく、気負わず、やる気を失わず、ずーっと努力し続けている。ただし、「やるぞ」みたいな感じじゃなくて、常時です。はい、それが本当の精進です。

Q2:気づくときに気づく…。

A: そうそうそう。気づくときに気づく。そうですね。今は訳分からん感じかもしれないんですけど、あとで多分…

Q2:言葉としては分かります。多分、体験として…ないから、分からないんじゃないかなという気がします。

A: 坐禅をやっている、意識が覚めているようなときとか、とりわけ調子がいいと感じているときに、今の問答、多分あとで文章化されてウェブに載ると思うので、それを意識が冴えているようなときに、ぜひ読み返してみてください。

その分かりかけてるような、分からないような、「え、何それ?」という感じとか、ちょっと抵抗を覚えるような感じとか、でも分かるような、でも抵抗を感じるようなその辺のうろつき、結構大事です。その辺のうろつきを大事にしながら、取り組みをぜひ続けてみてください。

(QさんはQ2さんに) 質問のお株を何となく奪われてしまったでしょうけど、こういうのもなかなか面白いもので、「あー、なかなか面白いなー」と手放しておくとうれしいですよ。

(テープ起こし: e)